

野に仏・里に仏

大谷 眞

第四回目の旅・その一
灼熱の土佐路に行く

1994年7月13日晴れ

フェリーの中はやたらクーラーがききすぎていた。昨夜午後9時20分、大阪南港から出港した船は、高知港に午前6時半に入港した。フェリー棧橋に待つバスは高知駅行のみで、仕方なく徒歩で市街地へ向かい、前回、雪渓寺からのバスを降りた停留所で始発のバスを待った。雪渓寺の境内で休息所を借り、服装を整える。本堂と大師堂に一礼して出立。お遍路区切り打ち第四回目のスタートだ。ほぼ3週間ぶりのお遍路となる。今回の目標は土佐清水までを予定している。

物もなぜか12キロ、不思議に前回と同じ。テントは入れたが、寝袋はシートだけにした。自炊用具も今回は省いた。暖かいものはこの時期不要である。その代わり、水筒に入れる緑茶のパックを用意した。前回、途中のスーパードで見つけたウーロン茶の水だしパックがけっこう重宝したからだ。緑茶でも水に入れておけば結構おいしく飲める。水筒のプラスチック臭を消す意味もあった。

ける気がする。お遍路用品で菅笠を置いていないか、と聞くつもりだったが、二人の話が佳境にある様子なので遠慮した。

ところで菅笠の件は、お遍路を始めた当時は時代錯誤もはなはだしいかぶりもの、と敬遠していたのだが、実際にこの四国を歩いてみると、いかに日本の風土に順応したものであるか理解できた。菅笠が頭に触れる個所は丸い輪だけである。これを頭に乗せるだけだからなるほど風通しがよい。前回は歩いた時、農作業の人や釣り人が、今でも使っているのを何度も見かけていた。顔を広く覆えること、頭が蒸れず、風通しの良いことでは、帽子よりはるかに機能的だ。ところが、いざこれを買い求めようとすると、案外、見当たらないのだ。札所と言えども、遍路用品をどこでも置いている訳ではないと後に知った。

焼けるような真っ青な空の下、次の第三十五番清瀧寺へ向かう。遍路のための標識を途中で見失い、仕方なく車道を歩いていると、ようやく現わ



れた。これに沿って車道に並行した商店街を後戻りし、途中からたんぼ道を山手に折れた。暑さは耐え難い。木陰は全く無く、意識がもうろうとし始めた。道のわきに立っていた自販機でジュースを買うが、なんとなく生ぬるく、体が冷えない。気分が悪くなり、近くにあった建物の、ほんのわずかに突き出たひさしの下に転がり込んだ。地獄に仏とはこのことだ。

少し休んでから、また意を決して照りつける太陽の下に飛び出す。少し

歩くと、やっと緑の多い参道に出た。汗にまみれ、あえぎながら第三十四番清瀧寺に到着する。とりあえず休憩所に荷物を預け、公衆電話から宿の予約をした。元気そうな声で、お待ちしています、と返事を聞いたとたん、どっと疲れがでた。

お参りを済ませ、一服したのち、えい！とまた灼熱の陽射しの下に飛び出した。商店街まで戻り、近くの店の女性に「喜久屋旅館」の場所を聞き、1キ口ほど引き返すと左手に見つけた。

建物に近づくと、中から男のお遍路さんが出てくるところだった。髭も伸び、随分やつれた顔をしている。目礼して入れ違いに玄関に入ると、少し間をおいて、女将さんが出て来られた。すぐに麦茶の入ったポットを出していただく。

「今のお遍路さんも、一番さんからずっと歩いておいでたのに、この暑さに二十五番さんからとうとうバスに乗ってしまわれたんですって・・・。」

当初は歩き通すつもりでも、やはり体力と気力

との相談、無理は禁物である。足の痛みに加えて、この暑さでは無理もない。私とて何度も歩き通すことに疑問を感じつつ、ようやくここまでたどり着いた。確かに、えんえんと続くアスファルトの車道には、お大師さんの足跡などみじんも感じられない。ただ、苦しみを苦しみとして素直に受け入れる心も、またお遍路ゆえの貴重な体験なのかも知れない……。

「今年はほんに雨も降らず、近年にない暑さですわ。」

と女将さんは言ってから、「お部屋とお風呂の用意をしますから、ちょっと待っててくださいね。」と奥へ戻られた。宿泊カードに記入をしながら、出された麦茶をいくら飲んで喉が渴く。どこか栓でも抜けているのかも知れない。

女将さんが戻ってきてクーラーのきいた部屋に通してくれた。風を受けて生き返った。部屋で荷物を整理していると、風呂が入った、とすぐに連絡があった。

「洗濯してさしあげますか

ら、外に出しておいてください。」

と言われる女将さんの言葉に甘え、汗だらけの上下をお願いする。彼女の話では、白衣は洗ってはいけないもの、と信じきって、一度も洗わずにここまで来たお遍路さんもいたそうだ。

「ご本人は背中墨が（南無大師遍照金剛と書かれている）流れてしまわないかと心配されてたようですけど、この暑さで洗濯しなかつたら、そりゃもう臭くて臭くて……。」と彼女は笑った。

パンツだけは遠慮し、お風呂でタオル替わりにゴシゴシ体を洗う。窓からあふれる陽射しの中で湯船に身を沈め、しみじみ思った。これほどの心地よさはたとえようもない。まこと極楽、極楽。

夕食時、女将さんがやって来られ、朝が早いでしょうから、と明日に予定している塚地峠越えの道を地図に書いてくれた。

「戦後は古い遍路道も荒れ放題になっていたので、奇得なお遍路さんがこの

地区のお年寄りなどにいる聞かれて、それを頼りにこの峠を越え、後で地図に書いて送ってくださいったんですよ……。」

それから地元の有志で遍路道をまた復興させたのだそうだ。さすがに今は、皆さんも多忙となり、草刈りなどの労働奉仕は、お金を出し合って専門の業者にお願いとのこと。四国各地の歴史ある遍路道が、このような人達の善意で守られて来たのだ、と改めて痛感する。

遍路のための地図を作成された「へんろみち保存協力会」の主催者、宮崎さんのことも、ここで教えていただいた。もともと実家が商売をされていたこともあって、よくお遍路さんに道を聞かれたそうだ。それなら、自分のいる地区だけでも標識をつけようと活動を初め、それがやがて四国全土にまで広がったのだという。今まで歩いて来た道々は、決して車や単車が通れるような道ばかりではない。時にはあえぎながら登る道を、あれだけの杭や標識を携え、なおかつ正確な距離を測りながら地図



を作られたのだ。そう考
えると、彼の作った赤い
ペンキ絵のお遍路さんの
マークが、私にはお大師
さんそのもののように思
えて来た。この「喜久屋旅
館」の女将さんも、泊まり
客でもないお遍路さんに
も、道を教えるべく地図
を書き、何枚もコピーし
わたし続けてこられた。
いろいろな人達の無償の
奉仕で、遍路道は守られ
続けて来た。このような
善意に支えられてこそ、
四国は霊場であり得るの
だ、あらためてそう思っ
た。

7月14日 曇りのち晴

3時起床。食欲ゼロの
口に無理やり朝食を押し
込み、4時前にはそつと
宿を出る。外はまだ真つ
暗。昨日書いていただ
い地図の目標を頼りに歩
く。所々、街灯にぼんやり
浮かび上がる場所にさし
かかる、いつそう闇が
濃く見える。疎水に沿っ
て歩き、山手への曲がり
角に注意していると、よ
うやく標識に出くわした。
あとはまっすぐ歩き、や
がて舗装道路の途絶えた
ところから山道に入った。
このあたりでようやく夜

が明け始めた。

5時過ぎ、塚地峠を越
えた。しばらく下った所
で水場を見つけ、のどを
潤す。体が望むのか甘露
のようにうまい。やがて
道は里に降りた。しばら
く川沿いを歩き、「宇佐大
橋」の手前で国道に出た。
目の前には海が広がって
いる。はるか下に漁をす
る小舟を眺めながらこの
橋を渡り、海沿いを歩き、
やがて現れた標識に沿っ
て山手に折れた。山とた
んぼに挟まれた道をさら
に行くと、途中いくつも
のお地藏様がお奉りして

ある。そのうちの一体に、まだ新しい菅笠が供えられていた。誰かの忘れ物だろうか？やがて道は第三十六番青龍寺境内に突き当たり、見上げるような階段の下に出た。「波きり不動尊」と言われる聞き慣れないご本尊にお参りし、納経を済ませてからまた来た道を引き返した。

先程のお地藏様の前まで来て、また菅笠を上げしげと眺めた。手にとつて見るとなかなか上等な作りである。お地藏様に供えてあるものは、だれがお下がりをいただいたも良いのだ、といつか長戸庵の熊さんが言っていたことを思い出した。もしかして、お大師さんが見るに見かねて私に授けてくれたのか、とも都合よく考えた。いやいや、お地藏様とて、この暑さには笠もご入り用だろう・・・、いろいろ思い悩んだ末、結局お地藏様の頭にかぶせ直し、また歩き始めた。

あとはまた炎天下の国道をひたすら歩いた。頭がぼうつとして、汗が

引つ切りなしに流れた。胸から腹にかけ、つー、つーと流れ落ちるのがわかる。時々木陰を見つけては、シートを広げてへたり込んだ。気は先を急ぐが、ぼーっとしてただただ体を休める。ところでいつの間にか、「風の通り道」を意識するようになった。同じ場所でも、

風が絶えず流れているピンプイントがある。木々や建物以外に、大地の温度差などの影響もあるのだろうか、そこに座れば、さわさわと常に風が吹いているのだ。これが一種の動物的な感覚で自然に感じ取れるようになった。人間は、より環境に適応して行くのだな、と思った。

第三十六番青龍寺から第三十七番岩本寺までは55キロ以上の行程である。結局今日は佛坂越えをした後、須崎の街に降りたところで偶然見つけた旅館に宿泊した。ところが対応は昨日の「喜久屋旅館」とは雲泥の差。同じ旅館業なのに、この意識の差はどこからくるのだろうか、なにやらさみしくなった。夕食は近くで

済ませ、早々に床についた。

7月15日 晴れ

昨夜は8時に就寝。12時頃、寝苦しくて目が覚めた。寝る前につけておいたクーラーがいつの間にか送風だけになっている。昨夜も室外機の冷房スイッチが入っておらず、苦情を申し立てたのだが、また切られたらしい。おかげで暑くて寝るところではなくなった。耐えきれず窓を開けると、今度は蚊が容赦なく針を突き立てる。結局2時には起き出し、3時には宿を出た。

街はまだ眠りの中だ。国道56号線をひたすら歩いた。暗いうちからまた汗が流れ落ちる。ときおり大型トラックが、深夜とあってビュンビュン飛ばしながら通り過ぎた。

4時半頃、東の空が白み始めた。道はしだいに登りとなり、長いトンネルを抜けた。久礼町から国道と分かれ、集落を抜けて、川沿いにさらに上流へ歩く。道幅はやがて狭まり、農家の点在する集落を抜けると完全に農

道になった。この道も突き当たり、左手に流れていた川とも分かれ、ここから山道に踏み込んだ。

道は次第に傾斜を増し、あえぎながら登る。汗が体中から吹き出してくる。水筒の水が乏しく、喉が激しく渴いた。竹が多いせいか、蚊もまとわりつく。車道への合流地点が近いとみえて、車の音がし始めたが、一向にこの急坂は終わる様子はない。体力の限界を感じ始め、10歩ほど登っては息を整える繰り返しとなった。体を前に倒して登るせい

で、顔からはとめどなくポトポトと汗がしたたり落ちる。急な丸太の階段を死に物狂いで登り切ると、やっと峠に出た。ここ

でまた国道と合流した。峠のドライブインの自販機の前でへたり込み、ポカリスエットを買って飲んだ。汗はまだしたたり落ちている。手ぬぐいでふいては絞り、ふいては絞り、3度やってもまだ汗が吹き出す。結局550ccと350ccの二本を立て続けに飲んで、ようやく一息ついた。しばらく休み汗が引い

たところで、公衆電話から第三十七番岩本寺近くの「民宿村の家」を予約した。それから気合を入れて、えいっとばかり焼け付くような炎天下へ飛び出した。猛烈に暑い。30分も歩くと、頭がぼーっとし始めた。何度も何度も休みながら歩く。歩いている時間より休んでいる時間の方が長いんじゃないか、なども思う。12時のサイレンが聞こえるころには、歩速は大幅に落ちた。歩きながら何度も地図を確認するが、一向に足が進まない。



ほうほうの態で岩本寺に到着し、ザックを下ろし、しばらく腰が抜けたようにベンチにへたり込んだ。一息入れた所で、手洗いの水を頭からかぶり、それから手ぬぐいに水を含ませ、体を拭いた。心地ついた所でお参りをすませる。

岩本寺を後にして、最後の踏ん張りで、少し離れた「民宿村の家」へ向かった。到着後、すぐ風呂に入れたのは本当にありがたかった。洗濯機も貸してもらい、上から下まで洗い上げる。昨日のクーラーの件で懲りていたので、此の件を聞くと、ここでも午前0時で切れるとのこと。近所への騒音対策で申し合わせらしい。

「」のあたりじゃ夜は窓を開けたら寒いぐらいだから・・・。」

と女将さんは言われるのだが・・・。

部屋での夕食の後、日記を書き上げ、隣の騒がしい客に閉口しつつ、それでもすぐに眠りに落ちた。

7月16日(前半) 晴れ
昨夜はやはり0時きっかりに目が覚めた。クーラーが切れたせいだ。仕方なく窓を開ける。開けると、どこからか下手なギターが聞こえてきた。この夜更けに、とうんざりする。これがえんえんと続き、そのうち今度は数人の若者のおしゃべりとなり、これにラジカセのロックが加わった。眠れぬまま、仕方なく起きだし、静かに出発の準備を済ませる。2時半にはすべて終わり、しばらくまた横になってみたものの、もう眠れない。3時前に出発する。

町にはまるで人影が無さう。そのうち、この家並みもすぐまばらとなり、やがて山々と田畑だけの一正道となった。時折、車がすごいスピードで通り過ぎて行く。空は満天の星、天の川もうつすらと見えた。何年ぶりだろう、天の川を見たのは。峠を越ると、照明も何もない真っ暗な道が続いた。ヘッドランプを消しても、うつすらとあたりが見えるのは、星明かりのせいだ。星でもこれだけ集まると、

やっぱり明るいのだ、と妙にうれしくなった。と、一台の小型トラックが通り過ぎ、しばらくするとこの車が引き返してきた。すぐ後ろでUターンをして、私と並行して徐行しながら、運転手が顔をのぞかせた。

「足摺りまで乗って行きませんかー！」

「ありがとございませす。歩いてお参りしていただきますので結構です。」

ありがたいが、頭を下げて、丁寧にお断りした。

「じゃあ、お気をつけてー！」

とトラックはまた走り去った。こんな夜中に、わざわざ引き返してまで声をかけてくれるとは。ありがたく感謝。

やがて国道との分岐点にでた。標識にそって、ここから山越えの遍路道へ進む。大きなゴミ焼却場らしい工場の敷地を横切り、うつそうとした山道に入った。空はようやく白み始めたとは言え、ここではまだヘッドランプは欠かせない。かなり荒れている様子だ。クモの巣をたて続けに顔で突き破った。マムシも遠慮し

たいが、クモの巣にも参ってしまう。クモの巣を避けるため、つえを前に突き出して歩くと、足元が不安になる。足元を杖で探りながら歩くと、顔にべっとりクモの巣が張り付く。どちらにしても、なんと無力で滑稽なことだろう。

やっとの思いで開けた所に出たと思つたら、二つのトンネルに挟まれた、ほんの小さな空間だった。この車道を横切り、さらに遍路道の標識に従い山道に踏み込んだ。お遍路の目印が木に下がっているのを目標に、さらにその方向へと進む。下草が生い茂り、またまたクモの巣の波状攻撃となった。

ようやくまた道が開けると、車道に突き当たった。再び右手にトンネルの入り口がある。はて？と首をひねった。地図を出して、今自分のいる場所を探すが、よく飲み込めない。なぜかお遍路の標識は消えてしまった。さっきの二つのトンネルは地図上に確かに記

載がある。しかしこれ以外のトンネルはどこを探しても地図には見当たらない。ふと、我が身を振り返ると、ようやく明けた空の下、白衣もズボンもクモの巣と草の実でどろどろになっている。啞然とした。

ねとねとしたクモの糸と草の実を取りながら、

トンネルは中でゆるく右にカーブしている。外に出ると、すぐまた目の前にもう一つトンネルがあった。4つ目のトンネル！？一体全体どうなっているのだろう？立て続けのトンネルにキツネにつままれたような心持ちだ。そのうち、あれ？どこかで見たような風景だ、



再度地図を見直した。コンパスと照らし合わせても、どうしても現在位置がつかめない。考えあぐねて、とりあえず、遍路道はあきらめ、一般道でトンネルを下る方向に進めば間違いはないだろう、と思ひ直し、このトンネルに踏み込むことにした。

と気づいた。よく見ると、なんと最初に出た、二つのトンネルに挟まれた空間ではないか！一瞬、頭が真っ白になった。空間の歪みか何かがあつて、時空が閉じている中を、ぐるぐる空回りしている様を想像した。(つづく)